

論文の要旨

論文題目 「驚き」「嫌」という感情表出に関する音声学的研究
—日本語母語話者とロシア人日本語学習者を対象とした実験に基づいて—

氏名 中林 律子

学位 博士 (学術)

授与年月日 平成 2009 年 7 月 31 日

本研究では、「驚き」「嫌」の感情が込められた問い返し疑問文を対象とし、以下の二つの点を明らかにすることを目的とした。第1の目的は、「(話し手は) 驚いている (または驚いていない)」「(話し手は) 嫌がっている (または嫌がっていない)」という感情を込めた発話について、聞き手である日本語母語話者がそのような感情が表れていると判定した場合、その発話にはどのような音響的特徴があるのかを明らかにすることである。第2の目的は、ロシア語を母語とする日本語学習者が日本語音声から「驚き」「嫌」という感情を判定する際に、聴取傾向にどのような特徴があるのかを分析し、音響上の手がかりが日本語母語話者とはどのように異なるのかを明らかにすることである。

第1章では、本研究の対象とする問い返し疑問文がどのような場面で使用され、どのような機能を持つのかについて先行研究に基づいて整理した。そして、問い返し疑問文により表出される可能性のある「驚き」「嫌」という感情がどのような条件で生起するのかについて述べた。

第2章では、日本語音声による感情の表出・理解に関する先行研究から明らかになっていることを整理し、先行研究の問題点を指摘した。これまで、日本語音声による感情の表出・理解には特に F0 及び持続時間長の変化が関与していることが明らかになっている。しかし、感情を表出している音声の句頭・句末の F0、及び、持続時間長の変化にまで着目した分析は行われていない。さらに、音節構造やアクセント型が音響的特徴の変化にどのように影響しているのかについてもほとんど検討されていなかった。もう一つの問題点としては、研究で扱う感情の定義や、その感情が生起する状況についての説明が明確でなかったため、研究結果の比較・検討が難しかったことが挙げられる。本研究では、この点についてもできる限り明確にし、実験を行った。この第2章では、音声による感情の知覚について異なる母語話者間で比較を行った研究についても概観し、異なる母語話者間で感情の知覚が異なっている場合に、どのような音響的特徴がその原因となっているのか、どのような感情の知覚が難しいのかについてはほとんど明らかになっていないことを指摘した。

第3章では、「驚き」「嫌」の感情が込められた問い返し疑問文にはどのような音響的特徴があるのかを分析・考察した。「韓国」「毎日」(頭高型語)、「現金」「片仮名」(中高型語)、

「カラオケ」「温泉」(平板型語)の3種類のアクセント型・6語を資料語とし、日本語母語話者11名がこれらの語を「驚き」「嫌」の感情が込められた問い返し疑問文として発話した音声資料を録音・収集した。これらの音声資料が適切に感情を表出しているのかどうかを判断するため、日本語母語話者57名を対象とした判定実験を行い、日本語母語話者の判定が高い割合で一致した発話について持続時間長及びF0を計測した。その結果、「驚き」「嫌」の感情が込められた問い返し疑問文には、主に以下の音響的特徴があることが明らかになった。

(a) 「驚き」の感情のみを表す発話

アクセント型の違いにかかわらずF0レンジが広く、有核語ではH1(アクセント核による下降の直前の部分)、無核語では終点のF0が高い。また、第1拍の持続時間長が語の中に占める割合が大きい。

(b) 「嫌」という感情のみを表す発話

発話の全体長の伸長が顕著であり、発話の始点のF0が低い。さらに、有核語の場合、発話の開始からアクセント核による下降が開始するまでの持続時間長が伸長する傾向がある。無核語の場合、発話のいずれかの部分でF0の上昇が極めて小さいか、下降している部分がある。

(c) 「驚き」「嫌」の両方の感情を表す発話

上記(a)(b)の両方の音響的特徴が見られる。ただし、(b)の発話と比較した場合には持続時間長がやや短くなる傾向があり、「驚き」の感情が持続時間長の伸長を抑制する傾向が見られる。

第4章ではロシア語を母語とする日本語学習者20名に日本語母語話者の判定一致度が高かった発話を聞かせ、判定にどのような傾向があるのかを明らかにした。ここではロシア人日本語学習者の判定を(1)日本語母語話者と同じ回答で一致、(2)日本語母語話者と異なる回答で一致、(3)不一致、の3点で分類し、その傾向を分析した。その結果、(1)については、ロシア人日本語学習者の回答は「驚き」「嫌」の両方の感情を表す発話に対しては高い割合で一致していたが、「驚き」の感情のみを表す発話、「嫌」という感情のみを表す発話に対しては判定が一致した割合が極めて低く、どちらか一方のみの感情が表れている発話を正しく判定することが困難である傾向があることが明らかになった。さらに、特定の感情を表していない発話に対しても判定が不一致である割合が高かったことから、日本語母語話者が特定の感情を込めていない発話からでも、ロシア人日本語学習者が何らかの感情が表れていると誤って判断する可能性が見られた。上記(2)について分析した結果、特定の感情を込めていない発話、「嫌」という感情のみを表す発話、「驚き」の感情のみを表す発話は、全て「驚き」「嫌」両方の感情を表していると誤って判定される傾向が見られた。また、無核語においては、日本語母語話者が「(話し手は)驚いていない」と判定した発話に対し、ロシア人日本語学習者が「(話し手は)驚いている」と誤って判定する割合が高く、アクセント核による下降のないことが「驚いているかどうか」の判定に影響し

ていることが明らかになった。

日本語母語話者の判定に対し、ロシア人日本語学習者の判定が複数の回答で一致した発話の音響的特徴を比較した結果、ロシア人日本語学習者の判定には以下の傾向があることが明らかになった。

- (a) 持続時間長が顕著に長い発話に対し「(話し手は) 驚いている」と判定する。
- (b) 有核語の場合、H2 (終点) の高い発話に対し「(話し手は) 驚いている」と判定する。
- (c) 無核語の場合、始点の高い発話に対し「(話し手は) 驚いている」と判定する。

第5章では、まずロシア人日本語学習者が「(話し手は) 驚いている (または驚いていない)」「(話し手は) 嫌がっている (または嫌がっていない)」と正しく判定できた発話とできなかった発話の音響的特徴の比較・分析を行い、どのような音響的特徴が判定に影響しているのかを明らかにした。その結果、ロシア人日本語学習者の判定には以下の傾向があることが明らかになった。

- (a) 「(話し手は) 驚いているかどうか」の判定に見られた傾向
 - (1) 有核語において、H2 が低い場合には「(話し手は) 驚いていない」、H2 が高い場合には「(話し手は) 驚いている」と判定する。
 - (2) 持続時間長が長い発話に対して「(話し手は) 驚いている」と判定する。
- (b) 「(話し手は) 嫌がっているかどうか」の判定に見られた傾向
 - (1) 句頭の F0 の高低が判定に影響していない。
 - (2) 有核語の場合、L2 (句末の上昇が開始する直前の部分) が低い場合、「(話し手は) 嫌がっている」と判定する。

個々の学習者の判定結果について分析を行った結果、正答率にばらつきが目立ち、感情を正しく判定する能力には個人差が大きいことが示された。さらに、全体の正答率が高い学習者であっても、「驚き」または「嫌」のどちらかのみ感情が表れている発話に対する正答率は低かった。アクセント型別に個々の学習者の正答率を比較した結果、平板型語の正答率の低い学習者が目立ち、日本語学習者にとって無核語からの感情の聴取が困難であることが示された。全体の正答率の低い学習者では、アクセント型によって正答率の差が大きい傾向、または特定のアクセント型の正答率が際立って低い傾向が見られた。

日本語学習歴が2年の学習者と3年の学習者の正答率を比較した結果、全体的に学習歴による正答率の差がほとんどないことが明らかになった。

音声による感情の表出・理解については、ある程度の普遍性があるという認識があり、先行研究においても異なる母語話者間で感情の知覚にはある程度の普遍性があることが示されていた。しかし、本研究から、日本語学習者にとって日本語音声から感情を適切に判断することは決して容易でなく、その能力は学習歴が長くなるにつれて自然に向上する可能性が低いことが示された。このことは、日本語教育において、音声による感情の表出・理解について適切な指導を行う必要があることを示している。